子どもの心に響く道徳資料に関する一考察

高知大学大学院　総合人間自然科学研究科　教育学専攻　学校教育コース　田邊重任研究室
四万十町立七里小学校　教諭　矢野有茶

1　はじめに

道徳に関する研修会や勉強会に参加する機会もあり、指導案も書けるようになった。指導展開も分かってきた。資料分析の方法も何となくわかってきた。導入、終末も工夫するようになってきた。でも、その道徳の時間は子どもたちの心に響いていたのかと言われると、自信がないのだ。子どもたちの心に響く授業をしようという思いを持って授業をしているのだが、空回りして子どもは上の空ということもある。すべての子どもたちが、自分なりに道徳的価値について考え、心を揺さぶられ、価値を自覚する、そんな授業ができていないのだ。「知・徳・体」すべてに関連している教育である道徳だからこそ、子どもたちの心に響くものでなければ意味がない。何とか、子どもたちの心に響く授業ができるようにならないものか、その思いから大学での研究を決意したのである。

2　研究の目的

今、子どもたちの置かれている状況は大変厳しいものがある。急速に変化する社会において、いじめや不登校問題の深刻化、そして日本の子どもが他の国の子どもと比べ自尊感情が低いことや規範意識が低下していることなど、様々な課題を抱えている。さらに、グローバル化が進む中で世界が求めている人材として必要とされる力を身に付けていくことも求められている。このような課題の克服やこれからの未来を切り開くために必要な力の育成のために道徳教育は大きな役割を果たすものだと考える。当然、道徳教育を行えば解決するというような簡単な問題ではないが、道徳教育の目標を達成していくことは、先に挙げたような課題を解決していくための一つのアプローチ方法であると考える。

しかし、道徳の時間における課題も浮き彫りになっている。道徳授業の形式化や形骸化の問題もその一つであり、この課題を解決することが早急に求められているのである。

そこで私は、道徳の時間（道徳科）をより充実したものにし、子どもたちの心に響かせていくことで、今日的課題を解決すると共に、今を生きる子どもたちに必要な力を育成したいという思いから、子どもたちが道徳的価値を自覚し深めていく上で大きな役割を果たす読み物資料の研究を通して、子どもたちの心に響く道徳授業を目指し、道徳授業の充実を図ることを目的とした。

心に響く読み物資料を研究するにあたり、「心に響く」ということの確認をしておきたいと思う。あいまいな「心に響く」状態をどのように捉えるのか、道徳の時間には「道徳的価値の自覚を深める」ことが求められる。道徳的価値の自覚を深めるとは、自分との関わりで道徳的価値について理解することである。それは価値の大切さを理解する価値理解は勿論のこと、大切であることは分かっているけれど、実現することはなかなか難しいというような人間の弱さを感じる人間理解や同じ道徳的価値を考えても人により感じ方や考え方が多様であることを理解する他者理解も含まれた理解のことであり、理解した道徳的価値を自分なりに発展させていこうという思いを含めたものを道徳的価値の自覚が深まった状態としている。この研究でいう「心に響く」とは、自分との関わりで道徳的価値を理解し、道徳的価値を実現しようとする状態のことを言うことにする。

3　研究内容

(1) 研究仮説

道徳で扱われる読み物資料は、自分の道徳観を振り返り、主人公の生き方を通して子どもたちそれぞれの感じ方で多様な考えを持ち、お互いが学び合い、道徳的価値を理解し、自己の生き方につ

いての考えを深め合う上で共通の教材として大きな役割を持つものと言える。

子どもたちが道徳的価値の自覚を深めるために、言い換えると子どもたちの心に響くために効果的に働く読み物資料があるのではないか、あるとすれば、その読み物資料を選択する教師は、資料そのものの持つ特性や学習者の実態、そしてどのように資料を扱うかという視点を大切にして選択しているのではないかと考えた。さらに子どもたちの心に響く時間にするために、選択した資料の特性を生かして活用しているのではないかという考えを持った。

そこで、読み物資料の選択をする際には「資料そのものの視点」「学習者の視点」「授業者の視点」の 3 つの視点が複合的に絡み合って選ばれているのではないか、そして教師は、選択した資料の特性を生かして活用しているのではないかという仮説をたて、読み物資料の「選択」と「活用」について研究を進めることにした。

(2) 研究方法

ア　道徳アンケートのねらい

実際に授業した教師がどういう資料が効果的であったと考えているのか、そしてその理由は何なのかということを探ることで、どういう資料が効果的に働いているのかという資料の特性やジャンルを探りたいと考えた。そのために道徳アンケートを作成し、調査した。

アンケートの作成にあたり、「資料そのものに関する視点」「学習者との関わりに関する視点」「教師に関する視点」という 3 つの視点をアンケートの中に盛り込み、実際に授業をした中で効果的に働いた資料名を挙げ、その理由を筆者が示した内容の中から選択してもらった。

イ　方法

被験者　高知県内の小学校 10 校（64 人）、中学校 7 校（45 人）合計 17 校（109 人）

手続き　担任の教諭（中学校は副担任も含む）を対象にA4 判のアンケートを配布し、実施した。

内容　昨年度の道徳の授業実践の中で、効果的であった資料名、出版社名を挙げ、効果的であった理由を選択するものである。（参考資料　表（1）参照）

(3) アンケート結果

アンケート調査の結果を小学校低・中・高学年、中学校、全体に分けてグラフに表した。

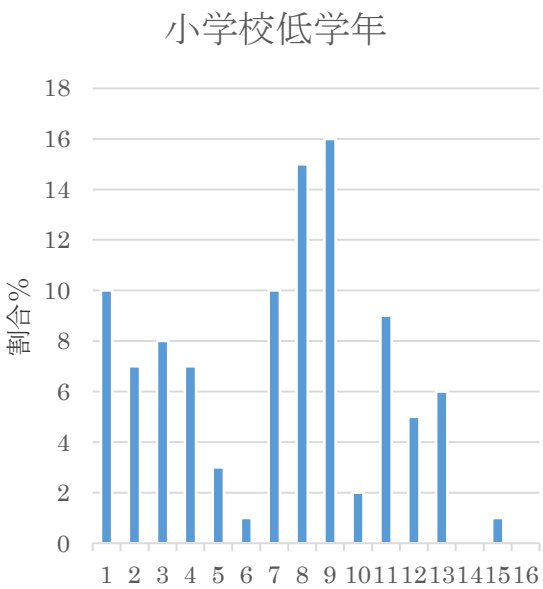

図 1　効果的に働いた理由（小学校低学年）

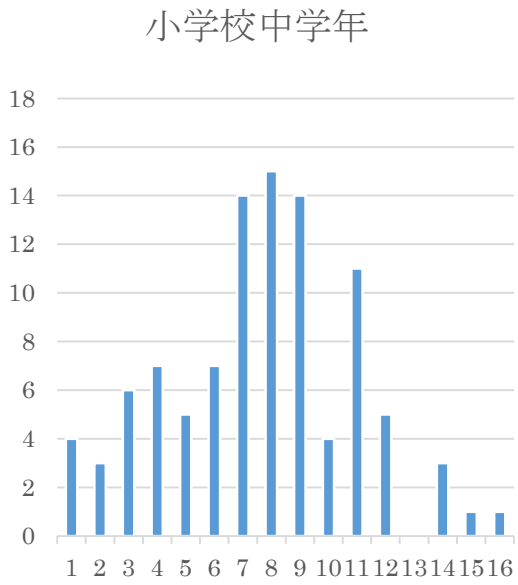

図 2　効果的に働いた理由（小学校中学年）

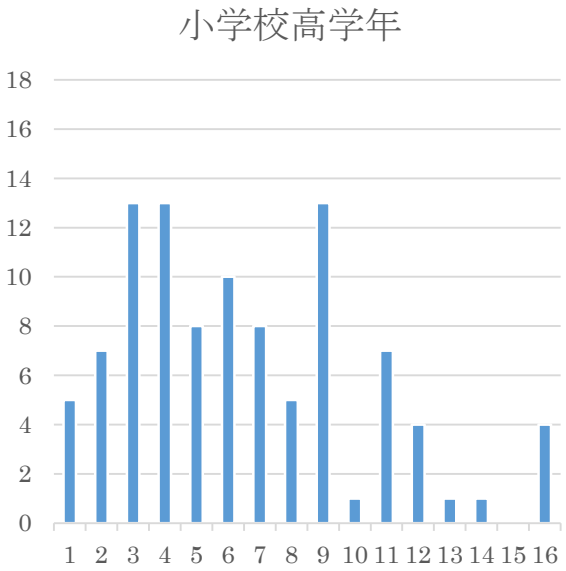

図 3　効果的に働いた理由（小学校高学年）

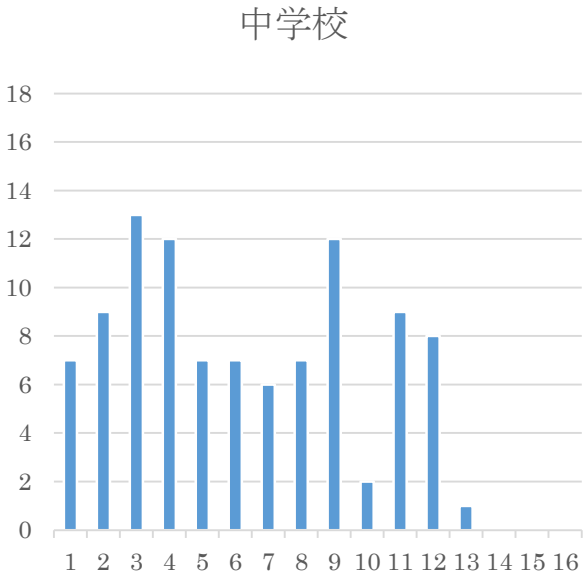

図 4　効果的に働いた理由（中学校）

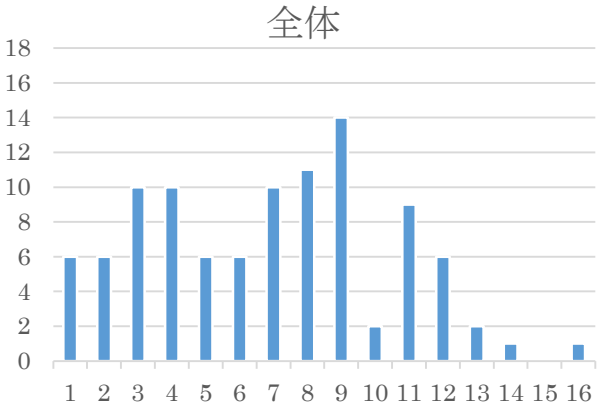

図 5　効果的に働いた理由（全体）

全体的に割合が高かったのは、「9　児童・生徒の実態に合っている」「11　ねらう価値が明確である」であった。

小学校低学年では、「1　道徳的価値の変容がはっきりしている」の割合が高く、「6　実話である」が極端に低いという特徴があった。

小学校中学年では「7　児童・生徒が体験している内容」の割合が高く、他の学年に比べて「10　地域の実態に合っている」という割合が高いことが特徴として挙げられる。

小学校高学年、中学校と学年が上がるにつれ、「3　主人公の心の揺れや生き方の方向付けが描かれている」や「4　主人公の姿が鏡となり高い価値を自覚できる」「5　将来への展望、生き方の方向付けが描かれている」の割合が高くなっていた。

中学校の特徴は、「12　活発な話し合いができる」の割合が高いということであった。

(4) アンケート結果からの分析

ア　児童・生徒の実態に合った読み物資料

上記の結果から、まず学習者との関わりに関する内容として、全学年共通に挙げられていた「児

童・生徒の実態に合っている」読み物資料について考える。アンケート結果から、読み物資料が効果的に働くためには、児童・生徒の実態を把握し、実態に合った資料でなければならないことが分かる。

ここでは、道徳性も含む発達における実態と読解における実態について考える。

学習指導要領解説道徳編等を参考に小学校低学年を中心に見てみると、低学年という時期は、自己中心的で感情で行動することの多い発達段階であり、善悪の判断は他律的で大人の態度により決めるような傾向にある時期である。そして、抽象的な思考はできない段階である。

学習指導要領解説国語編から「読むこと」における指導内容を確認すると、小学校低学年では場面や様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読む力が求められている。中学年から主人公の気持ちの変化の読み取りがでてくるが、低学年の児童には気持ちを読み取る力は弱いということになるのではないかと考える。

ここで、アンケート調査で小学校低学年において効果的に働いた資料として一番多く選ばれた「はしのうえのおおかみ」という読み物資料を例に挙げ、考える。

あらすじは、おおかみが一本橋で出会った自分より小さい動物たちに向かって「さがれ，さがれ」といじわるを言うのだが、体の大きなくまがやってきたときには、自分がさがろうとする。しかし、くまはおおかみをだきかかえ、はしをわたしてあげる。その行動によりおおかみは望ましい姿を自覚し、行動にうつすという話だが、先ほどの小学校低学年の発達実態、読解の実態を踏まえて考えてみると、「はしのうえのおおかみ」は、他人の気持ちを理解する力が弱い段階の児童にいじわるな行動と望ましい行動を通して道徳的価値について考えられる内容であること、自己中心的なこの時期の子どもの等身大の姿が描かれており、日常の学校生活においても似ているような体験をしている内容が描かれていること、ねらいである親切の視点のみで描かれているため、低学年の児童でも道徳的価値がつかみやすいことなどあらゆる視点において実態に合っている読み物資料であるということが分かる。

そのほかにも、実態と言えば、児童・生徒が興味・関心を持っている事柄や、子どもたちを取り巻く地域や学校における環境の実態、生活実態を含む体験などがあり、これらの様々な実態を把握することが重要である。

どんなに力のある資料でも学習者である児童・生徒の実態とかけ離れていれば、効果は期待できない。様々な角度から児童・生徒の実態を詳しく把握しておくことは、読み物資料の選定・活用において重要なことである。児童・生徒の実態に合った読み物資料はねらいを達成する上で効果的に働く大きな要素であり、児童・生徒の実態に合った読み物資料を使うからこそ、心に響くのである。

イ　読み物資料の特性

(ア)道徳的価値における主人公の心の変容の大きさ

ここでは、「資料そのものに関する視点」で考える。ここでも先に挙げた「はしのうえのおおかみ」で考えていく。この資料が効果的に働いた理由に「主人公の心の変容が大きいため」というものも挙げられている。「はしの上のおおかみ」の主人公おおかみの心の変容は本当に大きいのか、道徳的価値における主人公の心の変容を測る尺度を作成し、同じ「親切」の内容項目である読み物資料と比較してみた。比較を表した図が図 6 である。道徳的価値の高低を学習指導要領を基に設定した。醜さをマイナス 2、弱さをマイナス１、葛藤や価値への気づきなしを 0、強さをプラス 1、気高さをプラス 2 とし、5 段階で表している。あいまいな部分もあり、個人の主観により多少表し方に違いは出るとも考えられるが、5 段階にすることで道徳的価値の高低を掴みやすくなっていると考える。図 6 を見ると、はしのうえのおおかみの主人公の心の変容は他のものに比べて変化が大きいという結果が出ている。この変容の大きさは、小学校低学年の児童にと

って、道徳的価値を理解する上で明確につかみやすい要素であると考えられる。

実際に効果的であったと選ばれた「はしのうえのおおかみ」という読み物資料を分析すると、この読み物資料は「主人公の心の変容が大きく、鏡となる姿が描かれている」という効果的に働く資料の持つ特性があること、そして、学習者である小学校低学年の「体験していることが予想される生活実態に合った内容であり、この年齢の児童にとって１つの道徳的価値が明確に描かれているわかりやすい内容であること」、さらに授業者である教師にとってもねらいが明確で一貫して同じねらいで深めていける内容であることというように「資料そのもの」「学習者の視点」「授業者の視点」の３つの視点がすべて関連づけられながら盛り込まれている読み物資料であることがわかった。これを踏まえ、教師は読み物資料を選択していくことが必要であると言える。

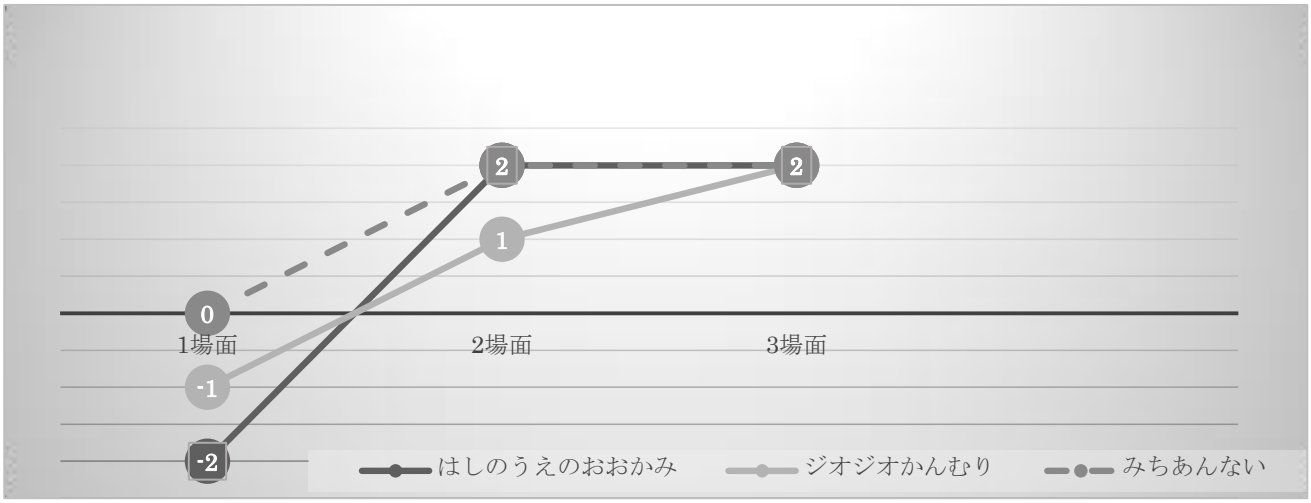

図６　道徳的価値における主人公の心の変容を測る尺度

(イ)実話の必要性と有効性

アンケート結果から、「6　実話である」が効果的に働いたとする割合は小学校低学年では極端に低く、学年が上がるにつれ高くなっている。このことから、「小学校低学年において実話は必要性がないのではないか」という仮説をたてた。

塚越（2012）は、保育園の保護者を対象に６項目の信念について 2007 年にアンケート調査を実施した。その結果、絵本や登場人物について、就学前までは 42%、小学校低学年までは 40%が架空の存在を信じていたが、小学校高学年では 16%、中学校以降では 2%と減少することを報告している。[(1)] この結果から、小学校低学年の児童においては、絵本の登場人物が実際にいると信じる場合もあり、この時期の子どもたちはお話の世界に抵抗なく入り込みやすいのではないかと思われる。仮説の通り、小学校低学年の児童は、フィクションの話であっても自己投影できるのではなかと考えられる。

小学校６社、中学校３社の副読本に実話がどのくらい掲載されているか調べてみた。小学校低学年では、7%、中学年 11%、高学年 43%、中学校 54%であった。この結果から、各出版社も小学校低学年においては実話を扱う必要性を感じておらず、小学校高学年や中学校において、実話が効果的に働くと捉えているのではないかと考える。

小学校高学年、中学生という時期は第２次成長期に入り、身体的に大きな変化が起こる。心理面でも心理的離乳が始まり、親や教師の干渉を嫌い同年代の友だちとの関係性がこれまで以上に強まる時期である。一般的に、悩みを抱えやすく情緒が安定していなかったり、自己評価が低下したり、自分中心の考えを正当化してしまったりする特徴が見られる。この発達段階の児童・生徒は、読み物資料の内容が素晴らしくても「どうせ、作り話だ。」「そんなことはやれるわけがない。」という

ような否定的な感情を抱く場合がある。この時に「この話は実際にあった事実だ。」「成し遂げた人物が現実にいた。」とする実話の絶対性は、児童・生徒の否定的な感情を覆すだけの力があり、これが実話の特性でもある。この実話の特性を生かすことで、小学校高学年児童や中学生に有効に働くと考える。

次に実話は効果的に働く読み物資料であっても、その特性を生かして活用しなければ効果がないという仮説の基、検証授業を行った。

規模が同じ A 校と B 校の 5 年生を対象に 2 つの実話資料を用いて検証した。1 回目は、「悲願の金メダル」という「感謝」をねらいとする読み物資料で A 校は読み物に書かれている内容のみの展開で授業をし、B 校は読み物の内容に実話だからこそ知りえたエピソードを添えた展開で授業を行った。2 回目は「こころの目」という「家族愛」をねらいとする読み物資料で 1 回目とは逆に A 校はエピソードを添え、B 校は資料そのままの展開で授業をした。授業後、それぞれに、富岡のルーブリックにより、児童のワークシートの内容を分類し、分析した。分類の結果は補足資料表(2)、(3)である。

ねらいとする道徳的価値の理解に関する C の内容を取り出した補足資料表(4)を見てみると、エピソードを加えた方がねらいとする価値について理解できているという結果が出ている。また、このねらいとする価値とは異なる道徳的価値における理解についてまとめた補足資料表(5)から、エピソードを添えていない、資料のみの内容の授業において、ねらいとは異なる価値について理解している児童がいたということが分かる。これは、実話には、多くの道徳的価値が混在し、それが話の深みを増し興味をそそるのだけれども、道徳的価値の理解において、混乱することにもつながっていると考えられる。実話を扱う時には、この点においての配慮が必要であり、活用の工夫が必要であると言える。さらに、自己理解や実践意欲について A 校 B 校の合計数で表した補足資料表(6) から、資料の特性を生かしたエピソードありの授業において、わずかではあるが、効果的に働いたと考える。

ただ、今回の検証授業においては授業の回数や対象児童数が少ないため、この結果を仮説とし、今後さらなる検証の積み重ねが必要であると考えている。

4　まとめ

(1) 研究のまとめ

この研究は道徳の時間（道徳科）を充実させるためのものであり、そのために道徳の授業において大きな役割を持つ「読み物資料」に焦点を当て、効果的に働く読み物資料の選択の視点とその読み物資料をどのように効果的に使うかという活用の視点で進めたものである。

研究を通して、道徳的価値の自覚を深めるために効果的に働く要素を持つ読み物資料はあると考える。それは、具備すべき要件の多数の項目条件を満たし、資料特性、学習者、授業者の 3 つの視点で選択されたものである。そして、選択条件を生かした授業を展開することにより、子どもたちの心に響く授業ができ、その授業で扱われた読み物資料は心に響く道徳資料となるのである。だからこそ、授業者である教師は、読み物資料の選択、活用における能力の向上が求められる。

道徳科においては、検定教科書が使用されることとなる。この研究は必要ないのかというと、私は必要であると考えている。研究してきた読み物資料の選定と活用についての内容は、道徳科のねらいを達成するために大切なことだからである。

道徳の時間（道徳科）を子どもたちの心に響く時間にするために、児童生徒の実態と読み物資料の特性を絡めた効果的な活用方法について、これからも研究を重ねていきたい。

(2) 今後の展望

これから、道徳は教科となり道徳科として授業が行われるようになるが、これまでの道徳の時間

の目標と大筋では変わっていない。時代の求める力を育成しながら、道徳科のねらいを達成していくことが重要なのである。

多様な授業展開に関する研究、時代のニーズに対応する授業の工夫をしていくことは大切なことであり、重要なことだ。ただ、あくまでも道徳科のねらいを達成し、子どもたちの心に響かしていくことが目標であることをしっかり認識し、手段、方法ばかりに気を取られるようなことにならないようにしなければならない。道徳科に伴い、様々な議論がなされ多様な意見が飛び交う今だからこそ、何を目指して授業をするのかということを常に念頭におくことが必要だと考える。この 2 年間の研究を道徳科の授業で生かしていけるよう、今後も試行錯誤を繰り返していきたいと思っている。

《引用文献》

(1) 塚越奈美
「想像の産物に対する幼児の認識に文化的文脈が影響を与える可能性
架空の存在や魔法のような力に対する大人の信念に注目して]
山梨大学教育実践研究紀要 №17（2012 年），

《参考文献》

・押谷慶昭　「道徳授業理論」 教育開発研究所　（1989 年）
・総理府青少年対策本部 「国際比較・日本の子供と母親―国際児童年記念最終報告書」
（1981 年／昭和 55 年），
・富岡栄「道徳教育２　保存版！道徳の通知表文例集 P8　現場発！新しい評価の形を変えようーパフォーマンス評価・ポートフォリオ評価―」明治図書　2015 年
・文部科学省「小学校学習指導要領解説国語編」　（平成 20 年）
・文部科学省「小学校学習指導要領解説道徳編」　（平成 20 年）

補足資料

表(1)　道徳アンケート

道徳の資料に関するアンケート

昨年度、道徳の授業をされた中で、資料について、下記のことにお答え下さい。
異動で新任された方は、前任校での実践でお答え下さい。
＊昨年度、学級担任をされていた方は「学年」を書き、されていなかった方は、「担任をしていない」を囲んで下さい。

昨年度　担任　（　　）年　　担任していない

昨年度、実践された資料の中で、道徳の授業を展開して、**展開が効果的でよかった資料を７つ**とそれぞれの**出版社名**をお書き下さい。
また、その**理由を右の理由番号から１つ選んで**お書き下さい。理由番号が該当しない時は、その理由を記述して下さい。

	資料名	出版社名	理由番号	該当しない時は、その他の理由を記述	理由番号
効果的でよかったと思う資料	1				１、道徳的価値の変容が、はっきりしている ２、人間の弱さが出ている ３、主人公の心の揺れが描かれている ４、主人公の姿が鏡となり、高い価値を自覚できる ５、将来への展望、生き方の方向付けが描かれている ６、実話である ７、児童・生徒が体験している内容である ８、児童・生徒が興味を持つ内容である ９、児童・生徒の実態に合っている １０、地域の実態に合っている １１、ねらう価値が明確である １２、活発な話し合いができそうである １３、この内容項目が得意である １４、この資料で複数回授業をしている １５、挿絵が気に入っている １６、他の教科等と関連させやすい
	2				
	3				
	4				
	5				
	6				
	7				

大変お忙しい中、ご協力ありがとうございました。

表（2)「悲願の金メダル―上野　由岐子―」児童の感想分類
Ａ校・・・エピソードなし　Ｂ校・・・エピソードあり

段落	内　容	エピソードあり Ｂ校	エピソードなし Ａ校
A	道徳的価値について触れた記述はない。 考えをもつことや意見を言うことの大切さ等について書いている。 ＊「みんなの意見が聞けて良かった。参考になった」「意見が言えて良かった」	0	0
B	資料中で人物の言動や出来事に触れているが道徳的価値を自分自身のこととして捉えていない。 ＊「主人公の判断は正しかった」「主人公はあのような行動をとるべきでなかった」	1	5
C	道徳的価値について気がついたり、理解したりしている。 ＊「学んだ」「気がついた」	4	1
D	道徳的価値について気がついたり、理解したりしている。しかし、ねらいと異なる道徳的価値についての理解である。	0	1
E	道徳的価値について理解し、その価値に対して自分を見つめ、さらに、その道徳的価値を実践して行こうとする意欲の記述がある。 ＊「……のように生きていきたい」 「……大切にして生活したい」	1	0
F	道徳的価値について理解し、その価値に対して自分を見つめ、その道徳的価値を実践して行こうとする意欲の記述はある。しかし、ねらいと異なる道徳的価値についての意欲である	1	0

表（3)「こころの目」児童の感想分類
Ａ校・・・エピソードあり（欠席１名）　Ｂ校・・・エピソードなし

段落	内　容	エピソードあり Ａ校	エピソードなし Ｂ校
A	道徳的価値について触れた記述はない。 考えをもつことや意見を言うことの大切さ等について書いている。 ＊「みんなの意見が聞けて良かった。参考になった」「意見が言えて良かった」	0	0
B	資料中で人物の言動や出来事に触れているが道徳的価値を自分自身のこととして捉えていない。 ＊「主人公の判断は正しかった」「主人公はあのような行動をとるべきでなかった」	1	0

C	道徳的価値について気がついたり、理解したりしている。 ＊「学んだ」「気がついた」	4	2
D	道徳的価値について気がついたり、理解したりしている。しかし、ねらいと異なる道徳的価値についての理解である。	0	2
E	道徳的価値について理解し、その価値に対して自分を見つめ、さらに、その道徳的価値を実践して行こうとする意欲の記述がある。 ＊「……のように生きていきたい」 「……大切にして生活したい」	2	1
F	道徳的価値について理解し、その価値に対して自分を見つめ、その道徳的価値を実践して行こうとする意欲の記述はある。しかし、ねらいと異なる道徳的価値についての意欲である	0	2

表(4)「Cに関する2校比較」

学校	内　容　C	エピソードあり	エピソードなし
Ａ校	道徳的価値について気がついたり、理解したりしている。 ＊「学んだ」「気がついた。」	4	1
Ｂ校	道徳的価値について気がついたり、理解したりしている。 ＊「学んだ」「気がついた。」	4	2

表（5)「Dに関する2校比較」

学校	内　容　B	エピソードあり	エピソードなし
Ａ校	道徳的価値について気がついたり、理解したりしている。しかし、ねらいと異なる道徳的価値についての理解である。	0	1
Ｂ校	道徳的価値について気がついたり、理解したりしている。しかし、ねらいと異なる道徳的価値についての理解である。	0	2

表（6)「E、Fに関する2校合計数」

段落	内　容	エピソードあり	エピソードなし
E	道徳的価値について理解し、その価値に対して自分を見つめ、さらに、その道徳的価値を実践して行こうとする意欲の記述がある。 ＊「……のように生きていきたい」 「……大切にして生活したい」	3	2
F	道徳的価値について理解し、その価値に対して自分を見つめ、その道徳的価値を実践して行こうとする意欲の記述はある。しかし、ねらいと異なる道徳的価値についての意欲である。	2	1